

研究ノート

現代の小学校における 自立に導くことを意図した学級経営の困難性に関する研究

大 前 暁 政

1. 研究の背景と問題

1-1 研究の背景

小学校では、初任者であっても一人の学級担任として学級を受けもち、中心的な仕事の一つとして、学級経営に関する指導を行っていく必要がある。

教育基本法が2006年に全面改正され、自立をより強く求めていく形で、義務教育を行っていくことが示された。義務教育の目的を定めた第二章、教育の実施に関する基本の第五条2には、「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」と記されている¹⁾。今後の学校教育においても、自立の力を育てることが引き続き重視されており、例えば、次期学習指導要領の方向性を示した2015年の中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」においても、「変化の激しい時代を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が求められる。」とされており、より自立を志向した改訂が行われることが示されている²⁾。

学級経営の力はますます重視されてきており、教員養成においても、その重要性は高まっ

ている。2006年の中央教育審議会答申では、教師として必要な資質能力を確実に育成するための「教職実践演習」が必修化され、教員の資質の一つとして、「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」が示された³⁾。また、2015年の中央教育審議会では、教員養成に関する課題として、「(前略：著者) 生徒指導や学級経営を行う力の育成にも対応することが重要である。」としている⁴⁾。2012年の中央教育審議会答申では、これからの教員に求められる資質能力の一つとして、「教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力」が挙げられている⁵⁾。また、2005年の中央教育審議会答申において例示された実践的指導力では、「授業力」、「学級経営力」、「子どもへの対応力」などの力を身に付ける必要があることが示された⁶⁾。

以上に示したように、教員養成の現場においても、学級経営の力を養うことが重視されてきた。しかしながら、2010年に文部科学省が委託したアンケート調査では、学校長が「初任者教員の段階」でどの程度の力が身に付いているかについて回答しており、「やや不足している」と「とても不足している」を合わせた割合は、「子ども理解力」54.7%、「児童・生徒指導力」63.7%、「集団指導の力」69.6%となった。特に学級経営に関する力である「集団指導の力」について7割近くが、教員養成段階での修得が不十分であることが示される結果となった⁷⁾。なお、この調査では、「集団指導の力」について、

「とても充足している」と回答した割合は、1.9%と大変低い数値であった。

以上のように、今後の学校教育では、集団指導の力などを含めた、学級経営を充実させていくことが求められており、教員養成段階でも学級経営の力を養っていくことが求められていると言える。

初任者段階において学級経営に苦慮している場面が学校現場において見られるが、先行研究においても、初任者段階において学級経営に困難さが見られる実態が報告されており、例えば、山本ら（2004）は、ある県の初任者139名（小学校58名、中学校44名、高等学校37名）に対して初任者が望む研修内容として、「教科指導」、「生徒指導」、「学級経営」の順で高かったことを報告している⁸⁾。

最近では、ベテラン教師でも学級経営に困難さを感じている例が報告されており、精神疾患になる例もあり、かつてよりも学級経営の困難性が増しているということも考えられる⁹⁾。

1-2 学級経営に関する実践の動向

学級経営の力を身に付けることは教師にとっては必須であり、特に初任者から学級担任を務める小学校教師にとっては、学級経営力を身に付けることはより重要であると考えられる。

小学校においては、通常、学級担任が教科指導も教科外指導も受け持つこととなる。つまり、学級担任が授業を受けもち、さらに教科外指導である集団指導や、集団づくりを行っていくこととなる。

学級経営の方法に関しては、教師が学級集団をより効率的に管理する方法よりも、現代では、より自立を促すための学級経営が求められてきており、教師の管理型の学級経営とは異なった形での学級経営が必要とされてきている。子どもを自立へ導くための学級経営の先行研究とし

て、例えば、蘭・高橋（2016）は、自立と協同を促すための信頼のネットワークづくりを基盤とした「創発学級」の形を提案しており、教師の適切な指導をもとにして、徐々に生徒たちに自分たちで学級の動きをつくっていくように導くのが望ましいと提案している¹⁰⁾。

河村茂夫（2006、2010）は、集団の発達を促す学級経営を提案しており、楽しい学校生活を送るためのアンケートであるQ-Uなどの調査を基にして、子ども達の学校生活における満足度と意欲、さらに学級集団の状態を調べながら、「ルール」と「リレーション」を確立し、教育力の高い自治的な集団を育てていくための取り組みを提案している¹¹⁾。

赤坂（2016）は、子どもの主体性と協働力を磨くための、「協働力を高めるチーム学習」や、「幸福感を高める話し合い活動」、「学力基礎を高める日常指導」などを取り入れながら、「自治的集団づくり」を進める手立てを提案している¹²⁾。

大前（2015）は、自立に導く学級経営をするには、段階があることを階層構造「学級経営ピラミッド」で示し、教科指導と教科外指導を連動させながら、学級づくりを段階的に進めていくことで、協同や自立的な活動を生み出し、個人の自立を促していく学級経営の形を提案している。「学級経営ピラミッド」の理論では、学級経営が、教科指導と教科外指導の連動をもとにして、その二本柱の階層構造が示されているだけでなく、各段階において具体的にどのような指導をすべきかの方策例が示されている¹³⁾。

1-3 問題の所在

以上のように自立を促す学級経営は様々な形が提案されてきているが、学級経営に困難さを抱える教員は少なくない。特に、自立を促す学級経営を進めることは、単に子ども達を管理す

ることを目的とした学級経営よりも、管理だけでなく自律的行動や自主的行動を促すという点で、一段と達成に困難さがあると考えられる。自立を促す学級経営を行っていくことが求められている現代、自立を視点として、学級経営にどのような困難さを現場教師は抱えているのかを調べることは、大きな意義があると考えられる。

従来より学級経営には、教科外指導だけでなく、教科指導と教科外指導の二つを含める形で実行していくことが求められており、特に小学校教師にとっては、学級担任が学級のほぼ全ての教科を担当することが普通であり、教科以外の特別活動や集団指導、生徒指導なども担当しているため、学級づくりの指導は教科指導と教科外指導の両方で行われていると考えることができ、本研究においてもこの二つの面の指導を学級経営としてとらえることにする¹⁴⁾。

先行研究に示したように、現場で教員がどのような困難性を抱えるのかについての研究や調査はこれまでも行われてきているが、学級経営に特化し、しかも自立に導くことを意図した学級経営のどの段階に困難性を感じているのかに焦点を絞った形で調査している例はほとんど見られないため、研究の余地が残されている。

これまでの研究では、学級経営の新しい形は、自立や協同を基盤として提案されてきていることには共通点はあるものの、全体的、具体的、かつシステムとして、どのような状態を経ながら学級経営を進めていけばよいのかの段階を示したものは少なかった。また、教科指導と教科外指導との連動を意図した学級経営の段階的構造を示した実践や研究も少なく、実践例も多くない。

2 研究の目的

本研究では、全体的、具体的であり、システム化されている研究として、「学級経営ピラミッド」を取り上げ、教科指導を「授業づくり面」、教科外指導を、「集団づくり面」としてとらえ、特に、自立を視点として、「授業づくり面」と「集団づくり面」において、小学校教員が、どのような困難さを抱えているのかを明らかにすることを目的とする。

3 研究の実施方法

3-1 調査方法

先に述べたように、「学級経営ピラミッド」の理論を例として、ピラミッドの各段階で、どのような困難性を感じているのかを調べることとする(図1)。

「学級経営ピラミッド」では、学級経営における教科指導(授業づくり面)と教科外指導(集団づくり面)の二本柱で、学級の状態の各段階を示す構造となっている。学級は、下の段階から順に上の段階へと状態が向上していくように進み、さらに、教科指導と教科外指導の横のつながりも連動していると考えられる理論である。



図1 学級経営ピラミッド(出典:「学級経営ピラミッド」(明治図書)大前暁政著)

この「学級経営ピラミッド」の理論に基づいて、どの段階で現場教師が困難性を感じているのかを、アンケートによって調べることにする。

3-2 調査協力者

現場に勤めている小学校教員を対象にアンケートを行うこととした。アンケートの協力要請は、教育委員会関係の教職員研修会の参加者に対して行った。協力の際、「学級経営ピラミッド」の各段階の意味や、どういう段階でどのような指導が必要なのかの具体的な事例を知っておいた方が答えやすいと考え、アンケートの実施前に、「学級経営ピラミッド」の理論について、直接、著者が説明を行うこととした。十分な解説を行うには、90分程度の時間がかかると考え、複数の教育委員会関係の教職員研修会の場を借り、著者が「学級経営ピラミッド」の概念を、90分程度の講座として、十分に説明した後で、別途、本研究のために、参加者にアンケートへの協力を依頼し、記述してもらうこととした。

3-3 調査内容

調査期間は、2016年8月であり、質問内容は、「問1 学級経営の中で、現代的な課題として、どのような困難がありますか。複数ある方は全てお答えください。」「問2 学級経営ピラミッドの左半分（集団面の成長段階）のうち、どの段階を達成するのが困難ですか。複数ある方は全てお答えください。」「問3 学級経営ピラミッドの右半分（授業面の成長段階）のうち、どの段階を達成するのが困難ですか。複数ある方は全てお答えください。」「問4 学級で自治的な活動をしていますか。具体的に、どのような活動をされていますか。」、である。なお、それぞれの回答ごとに、困難性を感じている場合は、理由を記入する欄を設けた。

3-4 分析方法

問1の現代的な課題については、様々な回答が予想されるため、分析方法としては、いくつかの特徴的なカテゴリーに分けて、主な意見を挙げて考察していくこととする。

問2と問3の学級経営の困難性に関するアンケートでは、「集団づくり面」と、「授業づくり面」の困難性を詳しく調べるため、集団づくりと授業づくりとに分けて、どのような段階に困難性を感じるのかを調べていく。さらに、学級経営ピラミッドの各段階において、なぜ困難性を感じているのかの回答を、学級経営ピラミッドの4段階のカテゴリー別に、できるだけ多様な回答を挙げ、分析する。

「学級経営ピラミッド」の理論を基にしたアンケートを行い、アンケートの結果を分析することで、学級経営における困難性が、教科指導と教科外指導のどの段階で起きているのかが明らかになると考えられる。さらに、教科指導と教科外指導の連動に関する困難性や、教科指導と教科外指導のどちらに困難性が多く見られるのかも明らかになる可能性がある。

また、学級経営の中の教科指導と教科外指導の内容に関する困難性の結果だけでなく、教員の経験年数によって困難性が異なるかどうかでも明らかになることが考えられる。そこで、学級経営ピラミッドの各段階での困難さの調査において、単に全体の割合を調べるだけでなく、教員経験年数によって違いがあるのかも、調べることにする。経験年数3～5年目あたりから教師としての経験を積んで学級経営もスムーズに進められることが考えられることから、その中間にあたる経験年数4年以前教員と5年目以降教員の2群間の比較を行うことにする。なお、統計解析は、サンプル数が少ない場合や回答に偏りがある場合に備え、Fisher's exact testを用いることとした。

また、学級経営においては、現代的な課題として、子どもの自立を促す取り組みが求められてきており、自治的な活動は、今後の学級経営においてより重視されることが考えられる。そこで、問4において、自立を促すための学級の自治的活動について、どの程度、学校現場で行われているのか調査していく。自治的活動は、学級経営の最終段階に位置づけられており、難易度が高いことが予想される。このアンケートにより、自治的な活動が学校現場においてどの程度行われているのかが明らかになるだけでなく、自治的な活動がなぜ困難なのかの理由も見えてくるのではないかと考えられる。

さらに、自治的な活動に取り組んでいると回答した教員には、具体的活動内容を、取り組んでいないと回答した教員には、その理由をアンケートで調べることにした。自治的な活動にも、指導の段階があり、学級経営ピラミッドの考え方では、「1 任せる」、「2 協同させる」、「3 問題解決させる」、「4 参画させる」の段階で高度な指導になるため、自治的な活動に関してできるだけ多様な回答を挙げるとともに、どのような自治的な活動が多いのかを分析していく。

4 現場教師へのアンケートの結果

4-1 学級経営における現代的な課題に関する困難性の結果

学級経営ピラミッドの理論をもとに、ピラミッドのどの段階で、困難性を感じているのかをアンケートによって調べた。

アンケートは、現在学校現場に勤めている小学校教員へ行った。アンケート実施時期は、2016年8月であり、実施した研修会の詳細はアンケート回答者の情報漏洩を防ぐために伏せることとするが、一つは、近畿地方の教育委員

会主催の研修会、テーマは「学級経営と授業づくりの方法」であり、もう一つは、関東地方の教育委員会後援の教職員研修会、テーマは、「学級づくりの方法」である。それぞれ、夏季教職員研修として希望する地域の教員が参加するもので、著者が講座において解説した後で、別途、本研究のためにアンケート協力を依頼した。アンケートは、114名に依頼し、88人（男性32名、女性56名）から回答を得ることができた。その内訳は、経験4年以内の教員が、59名（男性19名、女性40名）、5年目以降教員が29名（男性13名、女性16名）であった。ただし、各設問において未記載、無効回答は除外して解析することとした。

問1は、「学級経営の中で、現代的な課題として、どのような困難がありますか。複数ある方は全てお答えください。」である。回答の種類によって、「支持的なムードの集団づくりに関する困難性」、「家庭環境に関する困難性」、「学力差に対応する困難性」、「高い目標への挑戦に関する困難性」、「特別支援教育に関する困難性」、「保護者対応に関する困難性」、「規範意識の低さに関する困難性」、「協同学習などの現代的な授業への困難性」、「自立に向けた指導に関する困難性」、「学級経営以外が要因となる困難性」に分類することができたため、それぞれのカテゴリーごとに主な意見を挙げていくこととする。

【支持的なムードの集団づくりに関する困難性】

- ・言い方、付き合い方が分からない子が多くいます。(2年目女性)
- ・それぞれの児童の特性や課題が違っているため、仲間づくりでも難しい場面があります。(5年目女性)
- ・他者との関係が希薄に感じます。(2年目男性)

- ・周りの児童とコミュニケーションをとるのが苦手な手が出やすい児童に対して、きつい見方をする児童が多く、良さを認め合えないことがあります。(1年目女性)
- ・子ども達同士の横のつながりが固定化しています。コミュニケーションが取れず、内に秘めてしまうことがあります。(4年目男性)

【家庭環境に関する困難性】

- ・子ども達の背景にあるもの(家庭環境)が複雑で多様化しているため、宿題忘れ1つでも指導法は1つではないという困難があります。(2年目女性)
- ・家庭の問題をかかえる子への対応(貧困など)に困難さがあります。(5年目女性)

【学力差に対応する困難性】

- ・学力個人差が大きいです。(12年目男性)
- ・学力、体力の二極化があります。(1年目女性)
- ・学力面でも生活面でも差があります。(8年目女性)

【高い目標への挑戦に関する困難性】

- ・高い目標への挑戦に困難を感じます。(6年目女性)
- ・自己肯定感の低い子が多いように感じます。家庭的な背景もあると思いますが、学校では、どんな働きかけをして、自己肯定感を高めていくのが課題だと思います。(6年目男性)

【特別支援教育に関する困難性】

- ・普通学級における支援が必要な児童への十分な支援について困難を感じます。(9年目女性)
- ・相手の意図が理解しにくい児童がいて、集団活動に支障があります。(8年目女性)
- ・障がいがあり、騒いでしまう、手を出してしまう子への対応に難しさを感じます。(3年目女性)
- ・発達障がいをもつ児童と周りの児童との関係づくりに困難を感じます。(6年目女性)
- ・認めてほしい!ほく、私をみて!という子が多く、それに関係した問題行動に対応することに困難を感じます。(5年目女性)

【保護者対応に関する困難性】

- ・トラブルがあったときに自分の子どもの非を認めず、まわりの子、担任のせいにする保護者への対応に難しさを感じます。(3年目女性)
- ・課題のある児童の保護者との連携に難しさを感じます。(4年目女性)
- ・学校や学級担任に対する、保護者のニーズに差がありすぎると感じます。(13年目男性)
- ・教育ニーズの多様化に対応するのが難しいです。(10年目女性)

【規範意識の低さに関する困難性】

- ・子どもの抱える背景が多様化し、それを1つにまとめていくのが大変です。ルールを守れない子が多いと感じます。(11年目女性)
- ・人のことを考えて行動するというのが難しい子がたくさんいます。(1年目女性)
- ・子ども同士のトラブル(けんか等)が多いと感じます。(1年目女性)
- ・問題やトラブルの多様性の広がり、それに対応する知識や能力が若手教員に乏しいと感じます。(2年目男性)
- ・ルールを守れない(聞けない、立ち歩き、とびだし、友だちに暴力)子がいます。(6年目女性)

【協同学習などの現代的な授業への困難性】

- ・子ども達同士がつながり合った授業が難しく、教師対子どもになっています。(2年目女性)
- ・協同学習が難しいです。(8年目女性)

【自立に向けた指導に関する困難性】

- ・自治への挑戦が難しいです。(2年目男性)
- ・人に流されやすい児童が多く、リーダー的存在がいないと感じます。(4年目女性)

【学級経営以外が要因となる困難性】

- ・学級経営以外の校務分掌が多すぎます。(4年目女性)

有効回答数88名の回答割合(複数回答可)を算出した。すると、現代的な課題として挙げられていたのは、「支持的なムードの集団

づくりに関する困難性 23.9%」、「家庭環境に関する困難性 15.9%」、「学力差に対応する困難性 12.5%」、「高い目標への挑戦に関する困難性 12.5%」、「特別支援教育に関する困難性 18.2%」、「保護者対応に関する困難性 9.1%」、「規範意識の低さに関する困難性 8.0%」、「協同学習などの現代的な授業への困難性 8.0%」、「自立に向けた指導に関する困難性 6.8%」、「その他（事務仕事の多忙化、教師の質の低下、ネットの発達など） 11.4%」となった（図2）。

これらの回答において、教員の経験年数によって、現代的な課題への認識に差があるのかを調べるため、経験4年以内教員と、5年目以降の教員（有効回答数4年以内教員59名、5年目以降29名）に分けて、Fisher's exact testで解析したところ、経験年数による有意差は見られなかった。経験年数4年以内と5年目以降の各回答の内訳は、「支持的なムードの集団づくりに関する困難性（4年以内：23.7%、5年目以降：24.1%； $p>0.999$ ）」、「家庭環境に関する困難性（4年以内：11.9%、5年目以降：24.1%； $p=0.213$ ）」、「学力差に対応する困難性（4年以内：13.6%、5年目以降：10.3%； $p>0.999$ ）」、「高い目標への挑戦に関する困難性（4年以内：11.9%、5年目以降：13.8%； $p>0.999$ ）」、「特別支援教育に関する困難性（4年以内：15.3%、5年目以降：24.1%； $p=0.381$ ）」、「保護者対応

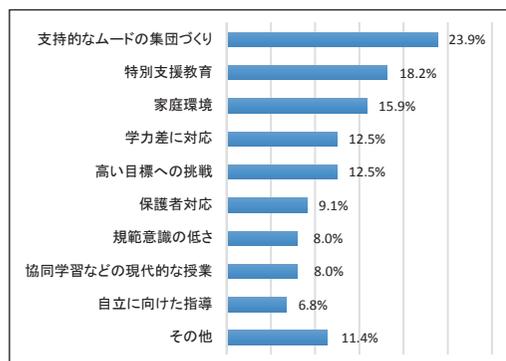


図2 問1に関する主な回答の割合

に関する困難性（4年以内：8.5%、5年目以降：10.3%； $p>0.999$ ）」、「規範意識の低さに関する困難性（4年以内：6.8%、5年目以降：10.3%； $p=0.680$ ）」、「協同学習などの現代的な授業への困難性（4年以内：10.2%、5年目以降：3.4%； $p=0.418$ ）」、「自立に向けた指導に関する困難性（4年以内：5.1%、5年目以降：10.3%； $p=0.391$ ）」、「その他（4年以内：10.2%、5年目以降：13.8%； $p=0.724$ ）」となった。

4-2 集団づくり面での困難性に関する現場教師の意識

学級経営の困難性に関して、学級経営ピラミッドの内、集団づくり面での困難性を調べるためのアンケートを行った。質問項目は、問2「学級経営ピラミッドの左半分（集団面の成長段階）のうち、どこの段階を達成するのが困難ですか。複数ある方は全てお答えください。」である。

有効回答数88名の回答（複数回答可）の集計結果は、土台から順に割合を示すと、「安心・安全 13.6%」、「協力・所属感 23.9%」、「協調 60.2%」、「自治 53.4%」となった（図3）。

これらの回答において、教員の経験年数によって、課題への認識に差があるのかを調べるため、経験4年以内教員と、5年目以降の教員（有効回答数4年以内教員59名、5年目以降29名）に分けて、Fisher's exact testで解析したところ、経験年数による有意差は見られなかった。

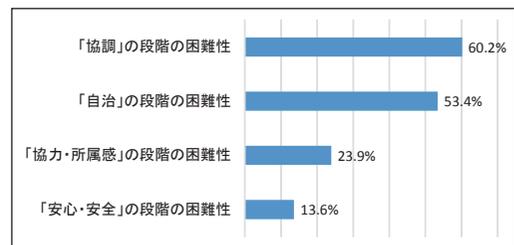


図3 問2に関する主な回答の割合

経験年数4年以内と5年目以降の各回答の内訳は、「安心・安全（4年以内：10.2%、5年目以降：20.7%； $p=0.199$ ）」、「協力・所属感（4年以内：23.7%、5年目以降：24.1%； $p>0.999$ ）」、「協調（4年以内：62.7%、5年目以降：55.2%； $p=0.644$ ）」、「自治（4年以内：54.2%、5年目以降：51.7%； $p>0.999$ ）」であった。

以下、集団づくり面での困難性に関して、学級経営ピラミッドの各段階において、なぜ困難性を感じているのかの回答を、学級経営ピラミッドの集団づくり面の4段階のカテゴリー別に示すこととする。なお、回答はできるだけ多様なものを挙げるように努めたため、「協調」の段階と「自治」の段階に関する回答が多く見られたことから、これらの回答に関しては、やや多くの回答を示している。

【安心・安全の確保に関する困難性】

- ・話を聴く姿勢や態度が身に付いていないです。(1年目男性)
- ・コミュニケーションを「たたたく」「悪口を言う」など、攻撃的に行う子がおり、その子は、ルールを理解しながらも実行することが難しいです。(2年目女性)
- ・ルールを守れない子にどう働きかけたら、できるようになるか、分からないです。(6年目女性)
- ・教師の力量に大きく関係してくるので、まだ自分には、子どもの「できる」「楽しい」を引き出せていないです。(2年目男性)

【協力・所属感を保障する困難性】

- ・人のことを考えられない子が多いです。また、けんかを上手く仲裁できません。(1年目男性)
- ・全員が所属感を感じられるのは難しいです。(2年目女性)
- ・所属するのを嫌がる児童がいます。「自分のいいところを書かれるのが嫌だ」と感じています。(5年目女性)
- ・具体的にどのようなことをすればいいのか分かりません。(3年目女性)

- ・人それぞれ思いが違い、見取ることが難しいです。(5年目男性)
- ・みんなは一人のために、一人はみんなのためにという気持ちを持たせることは難しいと思います。自分さえよければ・・・と思う子が増えてきたように思います。(25年目女性)

【協調する態度を育てる上での困難性】

- ・自己中心的傾向にある子どもが多くいます。(2年目女性)
- ・小集団では、気の合う者同士でまとまっていくことはできると思いますが、一つひとつの小集団が一つにまとまって協力していくためには、時間がかかるのだろうなと思います。(2年目女性)
- ・子ども達が自分のやりたいことを優先させてしまいます。また具体的にどのような姿がみられると達成しているのかが私自身つかめていません。(5年目男性)
- ・私自身が協調、自治を意識して、取り組めていなかったりで、自分自身が取り組みを行っていきたいです。(4年目女性)
- ・なかなか、全体として、学級をみられる子が少なく、自分だけがよければよいという考えが強いです。(1年目女性)
- ・小グループでの協力はある程度できるが、クラス全体でとなると、難しいように思います。子どもたちの意識・目標を同じ方向にしていくことはできても、それに対する望ましい行動はなかなかさせることができません。(4年目女性)
- ・個人差能力差のある中で、どう良さを活かしていくか難しく感じます。あとは、単純に係など時間の確保が難しいです。(12年目男性)
- ・協調や自治に向かう手立てが打てないです。その方法が分かりません。(9年目男性)
- ・小集団との協調はできても、学級全体で行動する時に、折り合いをつける力をまだまだ、子どもたちに育てることができていません。(13年目男性)
- ・協力→協調への変化が大変です。(10年目男性)
- ・4年生ということで、グループはできてきて協力はできているが、クラス全体としてまとまる・・・というのはなかなか難しいです。まわりに意識が向いていない子が多いです。(5年目女性)

- ・わがままな児童が折り合いをつけられませんが、今思えば、土台が満たされていなかったからだと気が付きました。(4年目男性)

【自治を達成することに関する困難性】

- ・自分があまり意識して行っていませんでした。(6年目女性)
- ・クラス全体で協力して行うことができていない現状があります。又、教師が指揮をとっての行動ばかりで子ども主体になってないからです。(2年目女性)
- ・手立てが分からず、筋道立った指導ができません。(8年目女性)
- ・低学年は自分のことでせいっぱいの子どもが多くいます。(2年目女性)
- ・特に自治は「自分たちで」というのが難しいです。先に言ってしまうことも多々あります。(2年目女性)
- ・どこまで子どもに任せて、どこまでやらせてあげればよいか、その判断が難しいです。他学級とちがう時点でなかなか実施できない場合もあります。(4年目女性)
- ・1年生はどこから、どこまで任せたらよいか、また、どのようにフォローしたらよいか分かりません。(3年目女性)
- ・子ども達の意識をそこまで(自治ができるようになるまで)向けさせることが難しいです。(1年目女性)
- ・重複する部分もあるが、一部の子ども達が自治の段階まで高まっても、人任せな児童がいることも多々あります。この誰かがやってくれるの意識を自分がしように変えていく段階に時間がかかります。(10年目女性)
- ・自分たちで進めていけるクラスをつくるのに時間がかかります。(6年目女性)
- ・学級活動が軽んじられて成長してくると、高学年で受けもっても、話し合いの形式を身に付けるので精一杯です。(12年目男性)

長段階)のうち、どこの段階を達成するのが困難ですか。複数ある方は全てお答えください。」である。

有効回答数88名の回答(複数回答可)の集計結果は、土台から順に割合を示すと、「できる・楽しい授業23.9%」、「主体的な学習37.5%」、「協同学習31.8%」、「高い目標への挑戦27.3%」となった(図4)。

これらの回答において、教員の経験年数によって、課題への認識に差があるのかを調べるため、経験4年以内教員と、5年目以降の教員(有効回答数4年以内教員59名、5年目以降29名)に分けて、Fisher's exact testで解析したところ、経験年数による有意差は見られなかった。経験年数4年以内と5年目以降の各回答の内訳は、「できる・楽しい授業(4年以内:28.8%、5年目以降:13.8%; $p=0.183$)」、「主体的な学習(4年以内:37.3%、5年目以降:37.9%; $p>0.999$)」、「協同学習(4年以内:35.6%、5年目以降:24.1%; $p=0.336$)」、「高い目標への挑戦(4年以内:25.4%、5年目以降:31.0%; $p=0.616$)」であった。

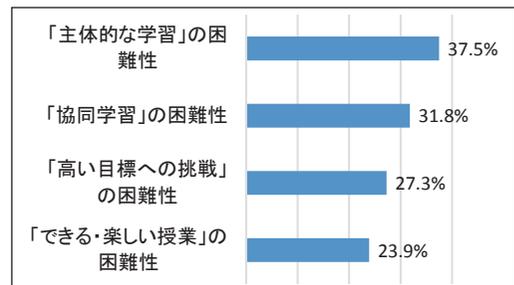


図4 問3に関する主な回答の割合

4-3 授業づくり面での困難性に関する現場教師の意識

授業づくりの困難性に関して、学級経営ピラミッドの内、授業づくり面での困難性を調べるためのアンケートを行った。質問項目は、問3「学級経営ピラミッドの右半分(授業面の成

以下、授業づくり面での困難性に関して、学級経営ピラミッドの各段階において、なぜ困難性を感じているのかの回答を、学級経営ピラミッドの授業づくり面の4段階のカテゴリ別に示すこととする。なお、回答はできるだけ多様なものを挙げるように努めた。

【できる・楽しい授業を成立させる困難性】

- ・全員ができる授業が学力差がかなりあり、困難であると感じるからです。(3年目女性)
- ・自分の教材研究不足です。(1年目男性)
- ・力量不足です。(1年目女性)
- ・子どもの集中が続かない、飽きてしまいます。(1年目男性)
- ・みんなができる授業をするのが難しいです。(3年目男性)
- ・教材研究をどこまでするのか？何を研究したらいいのか分かりません。(4年目男性)
- ・困難というより、自分はまだまだできていないと実感しました。特に、「楽しい授業」。1つの教材に対し、もっと自分が勉強しなくてはいけないと思いました。(6年目女性)
- ・良い実践をまねしたり、指導書通りに行っても、なかなか子どもにとって楽しい・できるとなりません。日々の疲れで授業の気力がなくなっています。(3年目男性)

【主体的な学習を成立させる困難性】

- ・どうしても教師主導になりがちで、子ども達のやらされている感がぬぐえません(特に高学年)。「できる・楽しい」というところから見直していかないといけないと感じました。(11年目女性)
- ・「自分から、学習したい」という子がまだまだ少ないからです。(2年目女性)
- ・自律していない、自己肯定感が低いからです。(2年目女性)
- ・言われたらやるという子はいるけれど、自分からやろうという子があまりいません。どうやって主体的な学習ができる子を育てたらよいか分かりません。(1年目女性)
- ・児童にとって楽しい授業ができていないです。(5年目女性)
- ・自分から進んで取り組んでいる子もいるが、「○○はすごいな」と考えるだけで、学習が苦手な子は、進められていないのかなと思います。(2年目女性)
- ・子どもが自ら課題を解決するための発問を設定できていないからです。(4年目男性)
- ・子どもにとって受け身な授業ばかりしてしまうからです。(10年目女性)
- ・「？」をつくってあげられていなかったです。(4年目女性)
- ・進んで学ぶ子もいるが、それが学級全体とはなっていないからです。(2年目女性)

- ・授業の学習についていくことができない子どもたちが(最低限おさえておきたい知識レベル)、主体的に学習するようにさせる手立てがはっきりしないからです。(1年目女性)
- ・自分自身の力不足です。(8年目女性)
- ・主体的な段階ができるのは、こちら(大人側)の提示の仕方に大きく左右されるので、教材研究が大切と思いました。しかし勤務時間内で学級事務や雑務をこなし、教材研究まですることは難しいです。(25年目女性)
- ・宿題など、課題を課題としてしか、子ども達に提示していなかった。なぜ、それをやるのか、の私自身の意識付けがうまくできていません。(13年目男性)

【協同学習を成立させる困難性】

- ・「答えのない問題」様々な答え、考えが出てくる中で、まとめ方が難しいです。(4年目女性)
- ・子ども達の関係性やメンバー構成によって活動が難しいです。(2年目女性)
- ・学力の低い子の参画意識を高めることが難しいです。(8年目女性)
- ・自ら追究していきたい課題を見つける段階で、子ども達が夢中になる、挑戦したくなるテーマのしかけ方が難しいです。(10年目女性)

【高い目標への挑戦を達成する困難性】

- ・協同学習ができていても、自己肯定感が低いことがあります。(2年目男性)
- ・どんな目標があるのか、こちらの準備不足です。(12年目男性)
- ・学力差があるため、どうしても勉強が苦手な児童は1つができないと全てがダメ、とネガティブになってしまいます。(2年目女性)
- ・子ども達が自分たちで考え、疑問を追究したりする授業づくりが今の私にはまだ難しいからです。(4年目女性)
- ・集団面と同じで、“自ら何かをしよう”と思わせることができないからです。(9年目男性)
- ・指示されたことをしっかりやることができる子が多く、そこまで満足してしまうからです。(22年目女性)

回答の中で特徴的なものとして、「全ての段階」と回答した教員もいた。その理由として、土台となる「できる・楽しい授業が達成できていないから。(2年目女性)」、「どうしたら良いか、分からない。有効な手立てが今まであまり見つけられていない。(4年目女性)」、「自分(教師)の教材研究の甘さ。(2年目女性)」などの理由が挙げられていた。

4-4 自治的な活動の困難性に関する現場教師の意識

自治的な活動に対する困難性に関してアンケートを行った。質問項目は、問4「学級で自治的な活動をしていますか。具体的に、どのような活動をされていますか。」である。

有効回答数77名の回答割合を算出した。回答の集計結果は、「意識的に行っている10.4%」、「行っている27.3%」、「あまり行っていない45.5%」、「ほとんど行っていない11.7%」、「その他5.2%」となった(図5)。その他と回答したのは4名であり、「学級を現在もっていない2名」、「行いたいと思いつながら、ためらっている。1名」、「判断ができない1名」、「どんな場面でも、時折、児童から動いた場合、任せる。1名」であった。

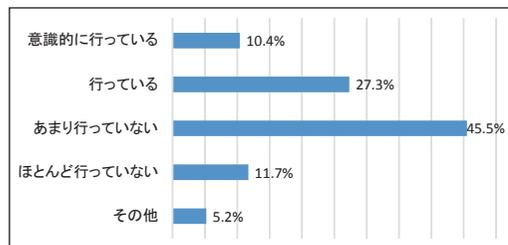


図5 問4に関する主な回答の割合

これらの回答において、教員の経験年数によって、自治的な活動への取り組みに差があるのかを調べるため、経験4年以内教員と、5年目以降の教員(有効回答数4年以内教員50名、

5年目以降27名)に分けて、Fisher's exact testで解析したところ、取り組み方(有効回答数4年以内教員:意識的に行っている1名2.0%、行っている15名30.0%、あまり行っていない23名46.0%、ほとんど行っていない8名16.0%、その他3名6.0%、5年目以降教員:意識的に行っている7名25.9%、行っている6名22.2%、あまり行っていない12名44.4%、ほとんど行っていない1名3.7%、その他1名3.7%)で、5年目以降教員の方が有意に高いことを認めた($p=0.014$)。

なお、自治的な活動に取り組んでいると回答した教員には、具体的活動内容を、取り組んでいないと回答した教員には、その理由をアンケートした。具体的にどのような取り組みをしているのかの回答を以下に挙げていく。なお、回答はできるだけ多様なものを挙げるように努めた。

- ・クラス会議の実践(10年目男性)
- ・係活動(12年目男性)
- ・自問清掃、自主的な係活動(10年目女性)
- ・「トイレのスリッパをそろえる」という学校目標を学級で達成するために、どうしたらよいか聞いてみたら「そろえたら先生に報告する」と子ども達から出て、はじめは報告したいからやっていた活動が、みんなが気持ちよくトイレを使える活動に変わっていきました。(22年目女性)
- ・「あそび係」をつくり、週に1回、学級遊びを企画しています。ルール、あそびの内容、会場づくり、友だちからの意見集め等全て任せています。困った時に助言はしません。(2年目女性)
- ・トラブルは全員で話し合っています。(2年目女性)

自治的な活動をしていない理由の回答は、以下の通りである。なお、回答はできるだけ多様なものを挙げるように努めた。

- ・こちらが主導してしまうことが多いです。話し合い活動など、子どもに任せると、うまくいかないことが多いからです。(4年目女性)
- ・コントロールしきれなかった経験があったためです。(4年目男性)
- ・まだ自治的な活動にいける段階でなかったからです。(5年目女性)
- ・低学年をもっているので、集団行動ができるようにする、協力できるようにすることで精一杯です。(8年目女性)
- ・子どもに任せることに不安を感じます。子ども達を自治ができる状態に育てられていません。他の職員や管理職からの指摘で、教師がしっかりとしなければと感じるからです。(3年目男性)
- ・とてもその段階まで行けるとは思っていないからです。(2年目女性)
- ・指導不足、時間不足、経験不足だからです。(1年目男性)
- ・難しく、やり方が分からないからです。(1年目女性)
- ・時間等の関係で、どうしても口を出してしまうからです。(3年目男性)
- ・自治的な活動をするという意識がなかったからです。(4年目女性)
- ・全くやっていないわけではないが、意識して取り組んでいませんでした。(3年目女性)
- ・私自身が自治の意味、内容を理解していなかったからです。(3年目女性)
- ・2年生を受けもっているが、子どもが自治的に活動すると収集がつかなくなってしまいうからです。(9年目男性)
- ・任せられないと、頭のどこかで考えているからです。(3年目男性)
- ・係り活動を行っている程度で私が口出しをしてしまうことが多いです。(1年目女性)

けることができ、学級経営の中の集団づくりに関するものと、授業づくりに関するもの、そして子どもへの対応に関するものがあった。集団づくりに関するものとしては、「支持的なムードの集団づくりに関する困難性」と、「高い目標への挑戦に関する困難性」、「自立に向けた指導に関する困難性」を、具体的内容として挙げることができる。集団づくりの現代的課題の特徴として、学級経営ピラミッドで言えば、ピラミッドの頂点に関わる指導に対して、困難性を感じていることが明らかとなった。さらに、「支持的なムードの集団づくりに関する困難性」を感じる教員も多く、学級経営ピラミッドで言えば、「所属感」をもたせるようにしたり、「協力」ができるように導いたりすることに難しさを抱えている教員も多いことが分かる。つまり、学級経営ピラミッドの左側の「集団づくり面」の土台は1年間という学級経営の中で達成できたとしても、その上の段階を達成していくことに困難性を感じていることが示唆される。

授業づくりに関するものとしては、「学力差に対応する困難性」、「協同学習などの現代的な授業への困難性」の二つが具体的内容として挙げられる。協同学習やアクティブ・ラーニング、探究学習といった現代的な授業づくりへの困難を感じている教員が多くいることが分かる。また、学力差に対応することへの困難性では、学力差のある集団において基礎学力を保障することとの困難さがある他、学力差がある中では、協同学習などの現代的な授業づくりがより困難になっているのではないかと予想される。

子どもへの対応に関するものとしては、「特別支援教育に関する困難性」、「規範意識の低さに関する困難性」の二つが具体的に内容として挙げられる。特別支援教育に対応することの難しさと、ルールやモラルを守れない子ども達の問題行動に対応することの難しさがあるのだと

5 考察

5-1 学級経営における現代的な課題に関する困難性に対する考察

現代的な課題に対する意識として、それぞれのカテゴリー別に回答を示したが、これらのカテゴリーはさらに、主なものとして、三つに分

予想される。言い替えば、特別支援教育と生徒指導の両面に対応することが現場の教師に求められており、しばしば、特別支援教育と生徒指導の両方が必要な場合もあり、より困難性を大きくしていることが予想される。

その他の主な困難性として、「家庭環境に関する困難性」や「保護者対応に関する困難性」が挙げられていた。貧困の問題や、家庭環境が教育環境にふさわしいものになっていない問題、愛着形成の問題、また、教育への様々なニーズに対応しなくてはならない問題など、非常に多岐に渡る問題がある。そして、この家庭環境や保護者に関する問題は、他の授業づくりにおける学力差や、子ども対応に関する規範意識の低さへの対応の問題、集団づくり面での支持的なムードをつくりだすことの難しさなどと関連があるように考えられる。

また、いずれの項目に対しても、経験年数による有意差は見られなかったことから、経験年数に関わらず、多くの教員が上に挙げた項目に対して困難性を感じていることが考えられる。

5-2 集団づくり面での困難性に関する現場教師の意識に対する考察

全体として、「協調」の段階や、「自治」の段階に対して困難性を感じる教員が多く、「集団づくり面」の土台となる「安心・安全」が最も困難性が少ないという結果となった。これは、学級経営ピラミッドの頂点に近づくほど、指導が困難になることが示唆される。

なぜ困難性を感じているのかの理由を見ると、小グループなら協力ができても、大人数での協調となると困難であるといった、質の高い集団づくりにおける困難性の理由が散見される一方で、ルールやモラルなどがバラバラで折り合いをつけるということが苦手であるといった子どものこれまでの育ちの問題や、手立てなど

を教師自身が理解できていなかった問題、これまでの指導で協調や自立に向けた指導が行われていなかった問題、低学年の自治がイメージできない問題などが挙げられていた。より大きな視点で見れば、質の高い集団づくりの指導が難しいというのは自然だが、それ以外に、子どもの育つ環境の問題や、教師の質の問題も影響を与えていると考えられる。

また、自治が難しいと答えた教員の特徴的な回答として、低学年の担任経験をもつ教員から、低学年においては、どの内容をどの程度任せていけばよいのかがイメージできないといった教員の立場による困難性の理由以外に、低学年は自分のことを自分でやるだけでも難しいなどといった理由や、低学年は自分の判断でなかなか動けない、低学年の自己中心性などが理由として挙げられており、低学年、中学年、高学年の発達段階によって、どの程度自治を進められるのかや、発達段階に合わせた指導法の習得の必要性が示唆される結果となった。

「自治」に関する指導は、経験年数の少ない教員ほど「自治までは難しい」といった回答が多く、指導自体に至っていない傾向があり、自治の前段階である学級のルールづくりや、人間関係づくりに苦慮していることが考えられる。ただし、学級経営ピラミッドの左半分の各段階において、教員の経験年数によって、課題への認識に差があるのかを解析したところ、経験年数4年以内と5年目以降の教員で、有意な差は見られなかった。なぜ困難なのかの理由を見ても、協調や自治の段階で、経験8年目教員が、「手立てや筋道がわからない」と回答しており、10年目教員が「自治的な活動が一度もできなかったことがない」、12年目教員が「高学年でも話し合いの形式を身に付けるので精一杯」などと回答していることから、経験年数が少ない教員と5年目以降教員との理由において質的に変わらな

い回答が見られ、協調や自治の段階で、それぞれの教員が同じような理由で困難性を感じていることが示唆される結果となった。また、学級経営ピラミッドの下位段階である安心・安全と協力・所属感の段階に困難性を感じる理由としても、6年目教員が「自分勝手な子どもの指導が難しい」ことや、同じく6年目教員が「ルールを守られない子への指導が難しい」といった回答が多く見られ、経験が少ない教員が抱える困難性と質的に変わらないことが示唆される結果となった。このことは、学級担任の経験を積めば自然と学級経営の各段階の指導法が身に付く、ということを期待するのは難しいことを示唆しているのだと考えられる。

5-3 授業づくり面での困難性に関する現場教師の意識に対する考察

困難性を感じるのは、学級経営の左半分における「集団づくり面」における困難性とは反対で、むしろ土台の方に困難性を感じる教員が多くおり、ピラミッドの頂点に近い、「協同学習」や「高い目標への挑戦」の割合は、「できる・楽しい授業」と「主体的な学習」と同じ程度の割合となっている。

困難性を感じる理由を鑑みると、頂点に近い段階を簡単に達成できている教員が多くいるというよりは、むしろ土台や土台に近い段階で困難性を感じる教員が多くおり、土台に近い下位段階での指導に時間がかかり、1年間という担任に与えられた時間内で、ピラミッドの頂点に近い上位段階の指導の取り組みにまで到達できていないことが可能性として挙げられる。例えば、「主体的な学習」に困難性を感じている教員の中で、『「自分から、学習したい」という子がまだまだ少ないから。』、「児童にとって楽しい授業ができていないこと。」などと回答している教員がおり、「できる・楽しい授業」の段

階がうまく進むと、子どもの主体性が自然と引き出されてくるはずだが、下の段階がまだ十分な状態に到達できていないからこそ、次の段階で困難さを感じている様子がうかがわれ、土台である「できる・楽しい授業」の充実が不十分だからこそ、その次の段階の「主体的な学習」の成立が難しいことが考えられる。

また、「協同学習」で困難性を感じる理由として、学力の低い子が学習への意欲がもてないことが挙げられていること、「高い目標への挑戦」で困難性を感じる理由として、学力差や自己肯定感の低さが挙げられていることなども、同じく、土台の「できる・楽しい授業」において学習意欲を高めたり、できるという自己肯定感を高めたりすることに失敗しているからこそ、より学級経営ピラミッドの頂点に近い授業づくりの段階に困難性をもつことが推察される。

このように「協同学習」や「高い目標への挑戦」を成立させる以前の段階で、困難性を抱えている教員が多くいることが、結果から推察される。

また、最も困難性が大きかったのは、「主体的な学習 37.5%」であり、子どもができると感じる授業や、子どもが楽しいと感じる授業を成立させることは何とかできるようになったとしても、子どもが自分から進んで問いを見つけ、その問いを解決する方法を自分で考え、進んで解決し、考察や自己評価を行うといった学習を自律的に進めていく「主体的な学習」を成立させることの困難さを示していると考えられる。つまり、「できる・楽しい授業」を成立させることは、主に教師主導の授業でも十分可能であるが、「主体的な学習」は、学習者が主体とならないと成立しない学習であり、教師主導の学習から学習者が主体となる学習への変換に、困難さを感じているのだと推察される。

困難性を感じる理由の中で、その他の要因

としてここでも教師の質の問題が挙げられており、手立てが分からないことや、指導力が不足していることが原因となって、困難性を感じている教員も少なからずいることが予想される。

学級経営ピラミッドの右半分の各段階において、教員の経験年数によって、課題への認識に差があるのかを解析したところ、経験年数4年以内と5年目以降の教員で、有意な差は見られなかった。なぜ困難なのかの理由を見ても、経験11年目教員が、できる・楽しい授業の段階で、「できる・楽しい授業ができていない」、経験10年目教員が、主体的な学習の段階で、「子どもが受け身になる授業ばかりしてしまう」、経験10年目教員が、協同学習の段階で、「協同学習にふさわしいテーマ設定ができない」、12年目教員が、高い目標への挑戦の段階で、「どんな目標があるのか教員の準備不足」などと回答していることから、経験年数が少ない教員と5年目以降教員との理由に質的に変わらない回答が見られ、右半分の各段階で、経験年数によらず同様の理由で困難性を感じていることが示唆される結果となった。

このことは、学級経営ピラミッドの左半分と同じく、右半分の授業の各段階でも、担任経験を重ねれば困難性が解決されるわけではないことが示唆されると考えられる。

5-4 自治的な活動の困難性に関する現場教師の意識に対する考察

全体的に見れば、「あまり行っていない」と「ほとんど行っていない」を合わせると過半数の教員が自治的な活動を行っていないと答えており、自治的活動にまで指導が至っていない学級が多くあることが推察される。

また、自治的な活動にも、指導の段階があり、学級経営ピラミッドの考え方では、「1 任せる」、「2 協同させる」、「3 問題解決させ

る」、「4 参画させる」の段階で高度な指導になる。行っていると答えた自治的活動の例として、係活動を任せることや、話し合いを任せること、日常的な子どもがすべき行動を任せることなど、少しずつ教師が見守る程度の指導を取り入れているという回答が多く、より高度な指導となる、「学級経営に参画させる形の自治」や、「問題を学級の子も達で解決させる形の自治」といった指導はほとんど見られなかった。

自治的な活動ができていない理由としては、教師主導から子ども主体に切り替えることの難しさや、子どもに任せることに不安を感じる、過去にコントロール不能に陥ったことでためらいを感じる、時間がない、任せられないと決めつけているなどがあつたが、特徴的な回答として、ここにおいても教師の質の問題が挙げられており、やり方が分からない、教師自身が自治を理解できていないといった内容が挙げられていた。

つまり、自治的な活動のやり方をそもそも知らず、また知っていても実行するだけの指導力がまだなく、もし知っていて、かつ、指導力があつたとしても、自治的な活動を子どもに任せることに不安やためらいを感じてしまうので実行できていないことが考えられる。

特に教員の経験年数によって自治的な活動への姿勢が異なり、経験年数の高い教員ほど意識的に取り組む姿勢が見られ、若い教員ほど、自治的な活動を行っていないことが考えられる。ただし、5年目以降教員も、「あまり行っていない」と「ほとんど行っていない」を合計数すると約半数となり、自治的な活動はあまり行われていないことが推察され、しかも、行っていると回答した教員も、自治的な活動の高度な指導には至っていないことから、自治的な活動をする姿勢はあつても、指導に困難性を抱えていることが示唆される結果となった。

5-5 経験年数による現場教師の意識の変化に対する考察

「集団づくり面」に関する全体の割合を見ると、学級経営ピラミッドの下位段階になるほど、困難性を感じている教員が少ないことが分かるが、一方で、協調や自治の段階においては、過半数が困難性を感じているという結果となった。また、それぞれの段階で、経験年数による有意差がないことが分かった。通常、教員経験を積むごとに学級経営の困難性が軽減されていく傾向にあると予想されたが、そうではないことが示唆される結果となった。すなわち、経験を経ても、割合は少ないとはいえ、下位段階である「安心・安全」や「協力・所属感」の段階で困難を抱えている教員は変わらないことが示唆される。上位段階である、「協調」や「自治」にいたっては、経験年数を経たとしても、多くの教員が変わらず困難を抱えていることが示唆される結果となった。これは、経験年数を経るだけでは、学級経営における下位段階も、上位段階も達成することが困難なことを示しており、教員が計画的に研修を行う中で、それぞれの段階を達成するための手法を学ぶ必要があることを意味しているのだと考えられる。教師として赴任して1年目からしばらくの間は、様々な苦悩を感じているという教員が多くいることは多くの先行研究でも見られるが、このことは、教員養成段階と学校現場とのギャップから生じるリアリティ・ショックと従来はとらえられてきた。しかしながら、本研究のように、5年目以降でも、困難を抱えた教員が、経験4年以内教員の割合と変わらずに同じ程度存在するということは、非常に多くの問題を包有していると考えられる。例えば、自治的な指導に関しては、自治的な指導の目的や方法を意識できていない教員がいたことから、教員が意図的に指導を行う中で、学級担任として有益な経験を

得ることが必要になるのだと考えられる。さらに、学級担任の意図的な努力だけでなく、研修の充実も必要になると考えられる。学級担任として経験を積む中で、新卒教員には初任者研修のシステムがあるが、今回の調査では、経験をj経るだけでは、困難性の解消には至らない可能性が示唆され、学級経営に関する研修を継続的に進めていく必要性を示しているのだと考えられる。

また、全体的に見ると、「協調」や「自治」の上位の指導段階の方により困難を抱えている教員が多く、過半数を超えている実態が明らかとなった。困難性を感じるのに、経験4年以内と、5年目以降教員で有意差はなかったが、5年目以降教員の方が「自治」の活動に取り組む教員が有意に高い結果となった。ただし、5年目以降教員の約半数はあまり取り組めてはおらず、しかも取り組んでいると回答した教員も、高度な自治的な活動は行えていない実態が示唆される結果となった。これらのことから、経験年数に関係なく自治の段階などの上位の段階は難しいことを示していると考えられる。特に経験年数の低い教員ほど、自治にまで指導段階が到達できておらず、なおかつ経験をj経る自治的活動に到達できたとしても、困難性を感じているという実態を示しているのだと考えられる。経験年数が少ない教員ほど自治への取り組みまでに到達している教員が少なくなることから、教員のライフステージの中で、経験が少ないうちは、まずは、「安心・安全」、「協力・所属感」の保障ができるよう重点研修を行い、やがて経験を積む中で、「協調」や「自治」といった学級経営の上位段階に関する研修を増やしていく必要があると考えられる。さらに、自治的な活動の高度な指導段階に到達している教員が経験年数によらず少なかったことから、自治的な活動の中で、特に高度な指導についても研修で習

得していく必要があることが考えられる。さらに、学級経営の現代的な課題にも、対応していくことが必要なことから、現代的な課題に対応した研修も必要になると考えられる。

また、協調や自治への取り組みの手法や理論自体を意識できていなかったと回答している教員も少なからずいたことから、大学の教員養成課程においては、学級経営における各段階を理論的に解説することが求められるだけでなく、特に自立を促す指導が求められている現代、上位段階である「協調」や「自治」に関する指導に関して、理解を促すような講義が必要になるのではないかと考えられる。

なお「授業づくり面」においても、土台の段階で指導に困難さを抱えているがゆえに、上位の指導段階である「協同学習」や、「高い目標への挑戦」ができていない実態が示唆された。これも「集団づくり面」と同じで、経験年数によって困難性への意識に有意差がなかったことから、「授業づくり面」でも、経験年数を経ることによって授業づくり面の困難性が軽減されることは期待しにくく、「集団づくり面」と同じように、継続的な研修を2年目以降も行っていくことが必要であることを示唆していると考えられる。ただ、「集団づくり面」と異なり、「協同学習」や「高い目標への挑戦」などの上位の指導段階に取り組もうとしていない教員や意識していない教員は少なかったことや、現代的な課題として、協同学習などの授業を工夫することを挙げている教員が多かったことから、上位の指導段階は教員に意識はされていることが考えられる。下位の指導段階に関する研修を充実させるとともに、上位の指導段階の具体的手法を、教員養成課程でも、教員になった後の研修でも継続的に取り上げる必要があると考えられる。

6 結論と今後の課題

学級経営の「集団づくり面」でも、「授業づくり面」でも、それぞれの指導段階で多くの教員が困難性を感じていることが明らかとなった。その理由として、自立に向けた段階的な指導の中で、土台づくりの段階で指導を適切に行うことに困難を感じている教員が多くおり、土台づくりから先の指導ができていないことが推察される結果となった。また、家庭環境の問題などの教室以外の教育環境の問題や、高度な授業づくりや自立に向けた指導なども含めた、様々な教育ニーズの多様化に対応できていないことなども理由として挙げられていた。今後も、より詳細に、学級経営のこういった段階で、具体的にどのようなつまづいているのかを、より大人数を対象にして調査を行い、明らかにしていく必要があると考えられる。また、教員の経験年数によって、困難性の質的な変化があるかどうか、今後調べるのが有意義な研究になると考えられる。

自治や協調における指導に困難さを感じる教員が過半数を超えていたが、本研究で明らかになった理由以外の要因として、学年による子どもの育ちの違いや、発達段階の違いによる学級経営の指導を変えていくことの難しさ、それまでの子どもの育ちに左右されることなどが考えられる。今回の調査では、それぞれの学年に沿った学級経営の指導段階があるという説明をアンケート前にしたことと、それぞれの教員が担任経験も異なることから、学年児童の経験の差や発達に関して、指導の困難性に違いが出るかどうかは調査しなかったが、今後は、子どもの経験や発達を踏まえた調査・研究をしていくことも必要になると考えられる。

特徴的な回答として、手立てが分からないことや、実力が足りないなどといった、教師の

質の問題が挙げられていた。先に述べたように、教員養成課程において、学級経営に関する実践的指導力を養うことは急務であると考えられる。学級経営に関する実践的指導力を養うには、どの内容を教えていけばよいのかを検討する必要が生じると考えられる。本アンケートの結果により、現場教師が学級経営の中身のどこで困難性を感じているのかが、少しずつ明らかになってきている。今後は、解析のデータを増やし、さらに精密に調査を続けることで、学級経営に関する指導力の中身を考察できるのではないかと考える。学級経営に関する実践的指導力の中身には、学部で身に付けることができるものと、現場で経験を経て身に付けるものがあることが予想される。今後の課題として、大学で身に付けるべき学級経営に関する実践的指導力の中身を検討することが求められるだろう。

【引用・参考文献】

- 1) 教育基本法 (2006)
- 2) 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会 (2015)『論点整理』
- 3) 文部科学省中央教育審議会 (2006)『今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)』
- 4) 文部科学省初等中等教育分科会教員養成部会 (2015)『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)』
- 5) 文部科学省中央教育審議会 (2012)『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)』
- 6) 文部科学省中央教育審議会 (2005)『新しい時代の義務教育を創造する (答申)』
- 7) 文部科学省委託三菱総合研究所 (2010)『教員の資質能力向上方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査集計結果』
- 8) 山本 利一・祐安 裕美・牧野 亮哉 (2004)『新採用教員が抱える教科指導の課題点と効果的な支援の在り方』埼玉大学紀要教育科学 53 (1), pp.21-27

- 9) 学校経営ハンドブック (2001)『新しい時代の「学校の危機管理」 学級崩壊が原因でベテラン教師がノイローゼに』学校経営 46 (4), pp.196-203
- 10) 蘭千壽・高橋知己 (2016)『創発学級のすすめ: 自立と協同を促す信頼のネットワーク』, ナカニシヤ出版
- 11) 河村茂雄 (2006)『学級づくりのためのQ・U入門—「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド』, (図書文化社), 河村茂雄 (2010)『日本の学級集団と学級経営—集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望』, (図書文化社)
- 12) 赤坂真二 (2016)『スペシャリスト直伝! 成功する自治の集団を育てる学級づくりの極意』, 明治図書
- 13) 大前暁政 (2015)『子どもを自立へ導く学級経営ピラミッド』, 明治図書
- 14) 筑波大学教育開発国際協力研究センター (2006)『日本の教育制度と教育実践—研修のためのヴィジュアル教材—』

Abstract

Difficulties of Class Management in Elementary Schools: Focus on Encouraging Independent Behavior in Children

Akimasa OMAE

An elementary school teacher teaches children and is in-charge of a classroom immediately in the first. Thus, an elementary school teacher has various responsibilities with respect to subject instruction and class management. During class management, children are taught to be independent, which is necessary in the modern education system.

An elementary school teacher had to train Tsutomu to behave himself, cooperate within a group, and solve problems like the other children. A questionnaire-based survey was carried out for an elementary school teacher, and an elementary school teacher identified the kind of difficulties faced in class management, which aimed to train children to become independent.

A questionnaire-based survey was conducted with a teacher of an elementary school. The results showed that an elementary school teacher experiences several difficulties in class management. Even an inexperienced teacher is a teacher with abundant experience. The difficulties experienced by the elementary school teachers are related to subject instruction and student guidance. Thus, teacher-training courses must focus on teaching a mechanism to balance subject instruction and class management.

Many elementary school teachers find it difficult to manage the governing activities and self-actualization of children. It is evident that an inexperienced elementary school teacher is unable to guide children during the governing activity. It is suggested that teachers in teachers must establish rules in the classroom and build relationships with the children to resolve the difficulties faced.

Key words : class management, stage structure of the class management, governing activity,
group management